

- ◎もう暗くなってきた、5月の暖かさようだったという昼間の温もりが車に残っていたが、夜になって外気も冷たくなってきている。何をしているかという、明日、久しぶりに“前鬼”から登ってみようと思立った。“前鬼”この名前が気に入って、澤山さんと2.3回、単独でも来ている。10年20年前は、「役行者（えんのぎょうじゃ）・修験者・鬼などは 昔話の登場人物 アウトローの マユツバもん」ぐらいに思っていた。最初に大嶺山に登った時、役小角（えんのおずぬ）の座像があちこちの祠に祀られていた。「ユダヤ人 だ」という仲間。また、北斎漫画には、“前鬼と後鬼を従えた役小角”絵がある。
- ◎同行は、またもや三宅さん。「夜 9 時頃 道の駅 吉野路上北山 会いましょう」「一人なら のんびり 高速代を節約して・・・」「ナビでは 2 時間半 これなら 大丈夫」帰宅ラッシュの混雑で4時間かかってしまった。帰りも同時間の復路、帰宅時間の反対方向だから・・・、ところが15分ぐらい早いだけだった。
- ◎道々はさくらの花が満開、大阪も奈良も。翌日の朝も、169号線沿い、薄墨色の桜が満開だった。
- ◎話は前後するが、奈良と新宮を結ぶ国道169号線で、普段は見かけないものをふたつ見た。ひとつは、夜の9時前、前の車が減速しはじめた。何だろうと反対車線を見ると、大きな鹿が身体をおこし、左右を見ながら、へたり込んでいる。腹の方から血が流れている。交通事故だろう。ふたつ目は、暗くなりかけた6時ころの帰り道、道路の前方、斜めの線が走っている。「なにかいな」近づくと電信柱より倍ぐらい長い丸太が、崖に引っかかって斜めに立っている。「あれれ あれが落ちたら 車は ペっちゃんこ そろり すり抜けねば・・・」
- ◎まだ積雪の影響が残っている季節、今回の前鬼も国道169号線から山のほうに入っていけるかどうか心配だったが、ネットで、「歩けば 2 時間以上の道 車が入れた」という情報を見つけ、久しぶりに登りたいと思った。
- ◎車のナビでは、3時間弱で着くことになっているが、奈良県の高田市あたりまで渋滞じゅうたいで車が走らず、到着時刻がずれ込んで、約束の9時ころになっている。走りながら、「おおここか 思い出してきたぞ 何度もきた道だ」といちいち感激しながら走った。高田バイパス、壺阪寺、へんな坂を降りたら吉野川。「そうだ思い出した 169号線は 吉野川沿い 大滝ダムがあり 北山村まで 新宮まで 一直線だ」
- ◎“北山村”一口メモ：人口500人 全国で唯一の飛び地の村 北山村は林業の村、ほとんどが“いかだ師”、新宮まで運んでいた。「新宮が和歌山県なら 和歌山県に入れてくれ」そんな希望が昔は通ったとか・・・。
- ◎9時少し前に、道の駅に着いた。三宅さんは6時ころに着いたそうで、「ま ワイン 飲んで」とビンをさしだされた。「旨い 月がでかい まんまる ウサギまで見えそう・・・」
- ◎道の駅吉野路上北山の横には、崖の下、北山川が流れている。吉野川は北に向かって、北山川は南に向かって、分水嶺はあったかな。川の向こうにコンクリート4階建てぐらいのでかい風呂屋がそびえている。乾きものをちょっといただき、お神酒を飲んで、いつもの車中泊、いささか寒かったが、朝まで眠った。
- ◎頑張っ、て、夜空を撮ろうかとしたが、「満月は 星は 見えないよ」と言われた。そういえば煌々とした満月の明かり、道の駅の街灯、これはダメだ。昔、テント場での夜景を撮っていたのを思い出した。気軽に構えず、ふらふらカメラを揺らすと、いい写真が撮れていたことを思い出した。今回はこれだ。
- ◎6時に目覚めた。昨夜は何時に寝たのか時計を見なかった。ぐっすり眠れた、途中、寒いなど目覚めたが、「ええい 寝てしまえ」と明るくなるまで寝ていた。シラフがあったのに・・・、である。
- ◎山の方は霧が出ている、川のそばの早朝はいささか寒い。夜具を収納しシートを掛け、昨日買ったハンバーグ弁当をほおばり、水を飲んだ。今回は歯ブラシを忘れなかった。
- ◎前鬼登山口まで30分ぐらい、169号線を南へ、次いで前鬼と書かれた看板を見て左折、「どうぞ 奥まで行けますように」と案じることもなく、何度も止めたことがある場所までやってきた。国道は桜並木が満開、横見するわけにはいかないが、すばらしい。前鬼道の途中に大きな滝があった。「これは知らなかった 前を向いて走るばかりで こんな りっぱな・・・」運転手は前を見ないといけないよ。
- ◎7:30 いよいよ出発。ここは標高600Mぐらい、いささか寒い。樹々に葉っぱはまだないが、新芽が膨らみかけたもの、ちっさな新芽がたくさん付いたもの、これからは緑みどり、葉っぱの勢力が強まる季節がやってくる。

- ◎「どうも違うな 以前と様子が違っている 前はこんなに建物が無かった・・・」舗装道を歩きながら、前鬼の“小仲坊”という宿泊所に近づくにつれ、頭をひねるオレ、オレの記憶が間違っているのかな。四五棟の山小屋風の建物が、整備された畑地が、白いミツマタが群生している。
- ◎ミツマタの花は白い、黄みがかった白、この群生は圧巻だ。紫色の山つつじも咲いていた。
- ◎廃屋あと、大きな寺社の跡なのか、民家の跡なのか、たくさんの石垣が残っている。かつて、百人単位の人口を思わせる。ネット情報：1300年の歴史、前鬼・後鬼の10人の弟子、それぞれの宿坊があり、修験者の世話をしてきたそうだ。今は“小仲坊”だけが残っている。前にはこんなところは通った覚えがない、不思議だ。
- ◎ケタイなキノコ発見。きくらげのような、オレンジの入った茶色、ふにやふにやふにや・・・。
- ◎頑丈な木で造られた階段がたくさんある。世界遺産のために作ったのか、前にはここまでたくさんの階段は無かったような記憶。“ひーひー はあーはー”急斜面を登っていく。かつて、しんどい山だという記憶がない、ジジイになってきているのだと実感。ロープが、くさがりが、谷が崩れているところが・・・、なかなか手ごわい。
- ◎ここらあたりのスギやヒノキ、風か雪か、ねじ曲がり嬉しくなるような姿で迎えてくれる。
- ◎クリカラ岩・ふたご岩、でっかい岩だが、覚えがない。見渡すと向こうの方にも山肌に岩が、ここは岩の山だ。
- ◎まもなく乗越、尾根道だ、あと少しだ、と思いながらもなかなか手ごわい。いつも言うことは、「な～にも考えず ぼ～っとして 地面を見て 一歩いっぽ これが楽しい のだ」
- ◎11時に“太古の辻”にやってきた。6年前、吉野から熊野神社まで縦走した。ここは何時頃に通過したのかな。大嶺奥駆道を七日間かけて歩いた、食料に水に、シラフ・・・重い荷を背負って歩いた。一年ぐらい前から衣川さんが、「奥駆 絶対 行こう」という。67歳のオレ、「重い荷を背負って 七日間も・・・無理かな・・・」「大丈夫」「大丈夫かな・・・」「食料は 軽いもの インスタントラーメンを20食・・・」「え ラーメンだけ・・・？」「水は 4リットル」「ガスボンベも 数を減らして」出発は5月中旬だったかな、始発電車、梅田駅で合流し吉野駅に着いたのがまだ朝だった。毎日、5時ころ起きだして歩き始めた。夜はライトをつけて小屋までたどり着いた。ライトをつけて真っ暗の中を歩いた朝もあった。初日に雨に降られ、靴の中まで濡れた、濡れた靴の不快感が七日間続いたのにはまいったね、と今になっては笑い話。
- ◎太古の辻、ここは標高が1500M。釈迦ヶ岳まであと300M登る、コースタイムで1時間40分、「ま 無理せず 行けるところまで で 帰りましょう」険しいところがいくつかある、事故でもおこせば大変だ。
- ◎建物が見えた、「おお 深仙の宿 がはは 知ってる 通った ここは 昼頃にやって来て 休憩をした ところだ」小さい祠を見たとたんに、当時の記憶が浮かんできた。「釈迦ヶ岳から降りて この祠を見たんだ」
- ◎ふかき山に すみける月を 見ざりせば 思い出もなき 我が身ならまし
 <西行：おおみねの神仙と申す所にて月をみてよみける>西行さん来てるんだね。
- ◎「1時になったら 釈迦の手前でも 帰ろう」と決めた。もうちょっとで釈迦ヶ岳、仏像の丸い輪が見える、もうちょっとだ、と言いながら踵を返し反対に向かって歩いた。
- ◎危険なところが2か所あった。「そんなもん・・・」と皆さん笑われるが、高所恐怖症の山好きの言葉として聞いてたもれ。「今は 水は流れていないが 鉄砲水で岩が崩れ 足の踏み場がない そんなところを U字に進む 持つところがない むむやバイ」「もうひとつは 下が崖 向こうまで 足が届かない ナムナム なんと 針金があったが 切れている 掴むものがあれば 平気なんだが・・・」
- ◎大きな岩の真ん中に穴が開いて、向こうが見える。自然にできたのか、人が掘ったのか・・・あそこまで行くのが、命がけだ・・・。修験道のオヤジ連が、嬉しそうに怒鳴る姿が見える。「軟弱な おまえら あの穴をくぐって来い 汚いおまえらの 精神が 過去が 洗い清められ 生まれ変わるぞ」
- ◎帰りはもと来た道を帰った。天気は晴れの予報だったが、どんより一日曇っていた。このどんよりは黄砂の影響らしい。中国大陸から黄色い砂が飛んでくるらしい。
- ◎なんとまたもや、地道を帰った。4時間足らずの運転はしんどい、ふらふらだ。山は満足。

民衆史の遺産<金属の民：北辺のゴールドラッシュ>

◎久しぶりに、この本をパラパラ、懐かしく眺めた。日本にかつて、どれぐらいの数の鉱山があったのか、ネットで見ると、なんとたくさんの鉱山がある。数を数えるのも、「こらあ 邪魔くさい」というほど羅列されている。我が地元の茨木にもチタンの鉱山があったらしい、もちろん閉山されている。

◎茨木市の京都亀岡に近い銭原付近に、チタン鉱山があったらしいが、資料がほとんどない、これは、疑問符？

◎個人的に、「金（きん）に興味は 欲しいですか 持っていますか」と問われれば、子ども時代に、“18金の万年筆”をもっていたぐらいかな。金の指輪やネックレス、金歯・・・あまりいい印象がない。だからと言って、ぽんと金の延べ棒を投げ出され、「持って帰り」と言われれば、相好を崩して持ち帰るぞ・・・。

◎金は、比重が水の19倍もある。岩が崩れ粉々になった砂、土砂が川に流れ、金が川の底に溜まる、それが砂金。そういえば川遊びで、砂の中にキラキラ光るものがある、あれが砂金だったのだ。

◎日本で最初の金発掘は平安時代、仙台市より50キロほど北の山地、黄金迫（こがねざま）という場所。

◎採金は、藤原三代の栄華と平泉の文化が結実していった。これらは主に農民の砂金採金によるものであった。

◎奥州：よく使う言葉だけれど、さて知らなかった。現在の福島・宮城・岩手・青森4県の一部だそうだ。

◎奥州・藤原三代・平泉・中尊寺、「なんだか 知らないな」「そうだ 行ってない県は 岩手県と沖縄県だけだった・・・」と気づいた。岩手と沖縄、行ってみたい。

◎奥州藤原氏は三代続いたが、源義経を自殺に追いやり、そののち、頼朝に攻められ滅びたらしい。

◎日本で砂金が採れるまでに、教科書で有名な金印や、古墳の中から金象嵌の刀剣なんかが出ている。

◎金売吉次：平泉と京の間、砂金を運んで往復した人物。実在が定かでない伝説上の人らしい。平家物語・源平盛衰記など、彼が登場する物語は多いそうだ。

◎すめろぎ（天皇）の 御代さかえんと あづまなる みちのくやまに くがね（黄金）花さく 大伴家持

◎このころ、奈良の都では大仏造営が再開されていた。黄金の献上を受け、年号を、「天平感宝」と改めた。

◎五月雨（さみだれ）の 降り残してや 光堂 芭蕉

◎ ゴールドラッシュは、西部劇の中に出てくる話だと思っていたが、日本にもあったらしい。

◎北海道の砂金地のうち、最も早くから知られた知内川付近とその奥千軒岳は、寛永16年キリシタン殉教で著名。労働者を確保するため鉱山は治外法権ぎみであった。犯罪者に交じり、隠れキリシタンがいた。伴天連の宣教師らは、隠れキリシタンを慰めるため、金堀に変装して松前藩に潜入した。

◎伴天連手記で、鉱山を掘り始めたのは2年前。その金は非常に純粋である。日本（本州）の金は非常に微細な砂だが、蝦夷の金は砂金ではなく金の小塊である。しかもこれらの金は陸地のいたるところにある。

◎知内の砂金は、仙台の人が鉱山師についた。日高、十勝、夕張からも次々と砂金が発見された。

◎明治期の手記。松前藩時代に、非常に大仕掛けで採集した跡がはっきり残っていた。畳六枚ぐらいの大きな石が整然と積み重ねられている。利別川の水を峰から峰へ導き、渦巻き型にぐるぐる水を回して、砂金を採集したものらしかった。大勢のアイヌ人を苦役に使用したものだろうが、「まったくたまげた 設備だ」

◎菱狩鉱山：なんと日本に現在も稼働中の金鉱山があるらしい。年6トン（世界で3000トン、中国は450トン）もの金が採掘されているらしい。“菱”の字が付くが、住友金属鉱山、鹿児島県にある。地下の坑道は延べ100キロ以上だそうだ。

◎金鉱石に水銀を注ぐと、金が水銀に付着して固まり、アマルガムができる。それを焙ると、水銀が蒸発し、金が採集できる。大仏の金メッキで聞いたことがある。現在、世界でこの公害問題があるらしい。

- ◎御池岳は鈴鹿山系の真ん中あたりからやや北にある。かつて、澤山さんらと何度も登った。雪の季節にテント泊もあった、T字尾根からの登り下りを何度も行った。てっぺんはだだっ広い、素晴らしいところだ。
- ◎何年前か前、トンネルから登ろうと車を走らせたが、「崖崩れで通行止め」手前から登ったが、てっぺんまで行き着かなかった。ネットで調べると、崖崩れ工事が少し先の5月でやっと完了すると出ていた。
- ◎6時、前川さんに乗せ、茨木を出発。1時間半で京都府南山城村、三宅宅に着いた。次に三宅車で出発。
- ◎「いなべ町から 鞍掛峠へ」が通じてなかったようで、走りだした車は滋賀県の地名が出てくる。「あれれ アカン」「スマホの ナビは 通行止めに になってないよ」「ムム ここまで来たら 行ってしまおう 通行止めなら 山を変えるかな」ネットで、最近の登山紀行では、皆さんいなべちょうの方から車で上がっている、まだ滋賀県側は通行止めだと思っていた。車は、日野市、東近江市、湖東三山、多賀大社とよく知った地名が続く、道路看板にも、「この先通行止め」とは書いていない、「行けるかな」「行けそうだね」途中崖崩れの工事で片側通行の場所があったが、開通していた。
- ◎10:30 登り始める。週末の今日はトンネルの両側とも駐車場が満杯。琵琶湖側の車道に止めた。
- ◎30分足らずで峠にやってきた。思い出したがここは簡単コース、来たことがある。T字尾根はよじ登りの斜度、恐がりのオレには不向きな登山道でした。雪の季節は道路の扉が閉まるので、下の方から登っていた。そういえば御池岳、10回20回登っているかも。
- ◎1時間ぐらい登ってきた、肌寒い、風がある、ジャンパーのフードを被っている。空は晴れているが、クイヤーではない、まさおではない。目の前のポッコリ大きな丸いお椀、きれいだ、中低木の樹々はまだ葉がない。
- ◎このルートには、ロープが張ってある、「ほかを 踏み 荒らすな」「最近 作ったんだ」
- ◎鈴北岳にやってきた。下の方に、送電の高架鉄塔があっちこちに見える。ポコリンポコリン台地の山だ。
- ◎1時ごろに御池岳山頂の標識のあるところにやってきた。どこがてっぺんだかわからない、ダラリンポコリンの台地、雪やガスの時は迷ってしまう。昔、T字尾根から登って、帰ろうと、下り口がわからず、あっちこちを探し回ったことがあった。見えてはいたが、どんよりとした日だったと記憶している。
- ◎「さ 飯にしよう」オレは朝が早いので、昨日の晩に弁当を作った。いつもの玄米ご飯に梅干しをちぎって入れた。野菜をいためた。手造りのパンにチーズだけ入れホットサンドで焼いた。サンドは登る途中に喰った。
- ◎「ちょっと下まで ここでゆっくり まってて」下へ、懐かしいT字尾根を見に行っただ。「崖のようだ 元氣だったね こんなところを 下ったんだ」トビが二羽三羽、輪を描いて舞っている。なんだか白っぽい鳥が飛んでいった、よく見ると、カラスだ。カラスも二羽三羽遊んでいる。トビのいるところにカラスがいる。食性が似ているというが、仲が良いのか悪いのか、最近トビもよく見かけるようになった。
- ◎雪の中、テントを張ったのはてっぺんの大地のどこかだった。朝起きてテントの扉を開けると、まわりはまっ白の雪、ひとりこー人いない白銀の世界でした。オレのことだから、夕飯時に、たくさんお神酒を飲んで、バタンキュー寝てしまった、そのあたりの記憶は飛んでしまっている。
- ◎三宅さんが、「山に登る 一生懸命 登る 体力を使う・・・ただ 感性が 抜けていく・・・」「がはは 面白いことを おっしゃる」「そらあ 感性 抜いたら アカン」
- ◎「おおお あそこが T字尾根」崖の向こう側に、歩けるような尾根がある、10年ぐらい前が最後かな、「もうこの 尾根は いやだな」最後のそう思った。上の台地、だらりだらり、ぽこりん、気持ちがいい。
- ◎このあたりの地名、「君が畑」と「大君が畑」がある。今日のトンネルへの道は、「大君が畑」を通ったが、T字尾根に向かった時は、「君が畑」を通った。君が畑には、「木地師の郷」という大きな看板があった。そこは全国の木地師の総本山で、百年前までは毎年の総会に全国から木地師が集まったとか・・・。
- ◎2時に御池岳の標識の前で記念撮影、「さあ ぼちぼち 下りましょう」近隣の山々、向こうに伊吹、その向こうにまだまだ真っ白けの白山が見える、「今年も 行きたいねえ 白山」
- ◎3:30 トンネル横の車まで下りてきた。ここから登ると往復4,5時間、ハイキング的に軽く登れる。

大島直行著〈月と蛇と縄文人〉

- ◎この先生の考え方、前にもちょっと読んだことがある。縄文人の世界観、縄文人の造った土器土偶、竪穴式住居や環状列石、こんななにやかやから、縄文人はこういう人たちだと論じておられる。絵を描いているオレとしては、死後何年かして、「岡村隆久の世界観は この表現は・・・」と論じられるのも面はゆいものだと思っている、そんなふうに決めつけなくてもとも思っている。
- ◎「じゃあ おまえはどうなんだ」と問われたときに、何と答えるか。縄文土器に登場する動物らしき顔、あれは物語、造りながら物語を語り始める、物語を始めたらもう止まらない。物語というのは前回の小林先生から教えられた。縄文の土器や土偶のあのケタイな形、あれは物を語るどころから出てくるねと思い始めた。
- ◎「さあ ちょっと造ってみるべ」暗くなってからの家の中は時間がたっぷりある、練って捏ねた粘土はいつでも隅に置いてある、やおら立ち上がって蓆(むしろ)をめくり粘土をひとつかみ取り出し、火のそばに座った。始めるまでは普通の器を、椀のようなものを造る予定だった、底の部分ができ、側面が少しずつ立ち上がりかけたところで、前回のいたずら的な感情が湧き出し、付属品やら模様を飾り付けたくなった。側面にちょっと穴をあけ、得意な奴めの顔をのぞかせた。奴めの顔は器から今にも出てきそうに見えるのではないのかな、なんてつぶやきながら、その横にワラや棒つきれで模様を一つひとつと入れていった。次にまた窓を開け、奴めの手を、次の穴に奴めの身体を、もうひとつの手を、なんて作業が進むうちに、オレの頭は奴めとお話で盛り上がり、時を忘れてケタイな器ができあがった。「十日ほどしたら 穴を掘って 焼いてみるべ がはは 楽しみだ みなに見せつけてやるぞ・・・」
- ◎岡本太郎の話：縄文土器にふれて、私の血の中に力がふき起こるのを覚えた。潤然と新しい伝統への視野がひらけ、我が国の土壌の中にも掘り下げるべき文化の層が、深みにひそんでいることを知ったのである。民俗に対してのみではない。人間性への根源的な感動であり、信頼感であった。
- ◎岡本太郎の話：激しく追いかぶさり重なり合って、隆起し、下降し、旋廻する隆線紋。これでもかこれでもかと執拗に迫る緊張感。しかも純粹に透き通った神経の鋭さ。常々芸術の本質としての超自然的激越を主張する私でさえ、思わず叫びたくなる凄みである。
- ◎岡本太郎の話：日本の文化は、大陸から直輸入され、そのまま伝統の中に編入され、我が国最大の古典としてまつりあげられている。大陸伝来の仏教美術 古墳時代の埴輪文化の楽天的な美感にも現代日本人にそのまま通じるイージーな形式主義が見て取れる。私がおもわずうなってしまったのは、縄文土器にふれたときです。からだじゅうが引っ掻き回されるような気がしました。やがてなんとも言えない快感が血管の中を駆け巡り、モリモリ力があふれ、ふきおこるのを覚えたのです。たんに日本、そして民族に対してだけでなく、もっと根源的な、人間に対する感動と信頼感、したしみさえひしひしと感じとる思いでした。
- ◎岡本太郎が、日本の古典、奈良時代、平安時代の文化文明が、大陸直輸入のものすごいものを、日本人が、こじんまりと、ちょっと平たんに、ちょっと抒情的にただけじゃないか、という。これにはオレも頭が下がる。奈良時代、平安時代の文化文明を、「いいな きれいな」と賛美していたオレがいるからだ。ただ思うに、1000年 1500年と日本に運ばれてきた文化文明が、日本ではまだまだ脈々と息づいているのに対して、本家の大陸では、「そんなものは過去の話 過去の遺物・・・」という感じで無くなっているのはなにかな。
- ◎縄文の文化なんて大げさに言いたくないが、縄文人が造った様々な品物は、岡本太郎同様、オレも、「すごい おもしろい したしみさえひしひしと 感じとる思い」と思う。世界一とか、一番だ、という勝ち誇った国意識は持つてはいかん、とも思う。だからと言って、何でもかんでも、「大陸からの 直輸入」という考え方もよくない。大陸からのそれはすごいものだったと思うが、そんなものが入ってくる以前に、ケタイな文化文明を、しかも1万年以上も持続していた我らの祖先の縄文人に拍手、はくしゅだ。

大島直行著<月と蛇と縄文人>

◎大島先生の意見：岡本太郎や小林達雄が縄文人の世界観の存在を提唱したとしても、その世界観によって表現された縄文土器の形や模様が、なぜあのように奇妙奇天烈、摩訶不思議に姿になるのか、そのわけは誰にも説明することができませんでした。

◎赤坂憲雄著<岡本太郎の見た日本>狩猟の民が宿命的に背負わされた生存の秘密が、この根源に横たわるものが、語り明かされている。動物の形をした神はいったい、どこからやってくるのか。太郎は言う、獲物となる動物は一義的に闘いの相手であり、敵であるが、同時にそれを糧として生きているがゆえに、全存在を委ねざるをえない相手でもある。そうした獲物は神聖な存在、すなわち神となる。こうした矛盾律こそが、原始人の生存の悲劇的な条件であった。生命の連鎖の中に巻き込まれてあることの、不安と危機。強烈な矛盾に引き裂かれながら、それに堪え、克服する原始の人々がいる。その強靱な表情ほど豊かに誇り、示している芸術を、私は知らない。そう太郎は言う。縄文土器の異様な神秘性をめぐって、この複雑にして怪奇な縄文式模様は、何を意味しているのか。強烈な宗教的・呪術的な意味を帯びており、非日常的かつ超自然的な、つまり四次元的性格を指し示しているという。

◎この問題に果敢に挑戦する学者がいます。ネリー・ナウマン、田中基・・・大な成果があります。

◎大島は：同様にミルチャ・エリアーデ、ネリー・ナウマン、カール・ユング・・・刺激を受け挑戦をしています。

◎大島は：土器や土偶の形と模様だけに世界観が表現されているだろうと考えていました。しかし、読み解きの基本に、人間とは呪術的、宗教的な存在だという前提を置いてみると、以外にも土器や石器、これまでの、「祭祀道具」などをひとまとめにされてきた土製品や石製品、さらにはお墓や竪穴住居、ストーンサークルや貝塚などの大地のデザインにも、月のシンボリズムの考え方が当てはまっていたのです。

◎大島は：ミルチャ・エリアーデ、ネリー・ナウマンの研究から、読み解きの鍵が、象徴：シンボルにあることを教えられました。

◎象徴的思考は人類が誕生以来持ち続けている根源的な思考方法です。農耕社会の合理性・科学的思考方法の影響を受けていない縄文時代は、きわめて純粋な形でものごとが象徴的に思考されていたと思われます。

◎大島は：「死と再生」のイメージからさまざまな象徴が生み出され、それが基盤となって構想されたと考えたのです。死から逃れるために、再生を希求する。誰もが選び出した象徴が、「月」だったのです。

◎月：潮の満ち干と月、水を司る天体としての月、女性が身ごもるための月の水・・・月はその運行周期から女性と同格と位置付けられ、子宮あるいは女性器になぞられました。生きるものすべてが月の水に生かされるのであり、その水を月からもたらすものが、「蛇」だと考えられました。蛇は、「男根」月は、「子宮」これは、「死なないもの=再生」象徴の中核に置かれ、さまざまな事象と関連付けられ、体系をなしています。

◎月と蛇につながるシンボル・象徴は、蛙・猪・鮫・貝・梟・熊・鯨です。脱皮、冬眠、息継ぎ、交換菌列、牙、これらが再生、甦りを象徴する。色も、緑が樹木の再生、赤が血の色で再生、数字の三は月の相、三日月などで月の相の象徴。竪穴住居や墓、ストーンサークルや環状列石、貝塚や構造物・・・子宮を象徴している。

◎縄文人の形あるもののすべてが、流行で左右されたものではなく、ただひたすら再生を願ってシンボライズされた造形の継承であり、「月とシンボリズム」は縄文人の「物造りの原点」、「大地のデザイン原理」と呼び変えてもいいでしょう。

- ◎茨木を5:30に3人で出発、京都で1人合流し、3時間かけ8:30に佐々里峠にやってきた。峠までの道中が素晴らしい。何が素晴らしいかというと、道々に桜が、白っぽい花の木が、樹々の小さい若葉の枝々、水っぽい霧が流れ、そこにキラキラ光が当たる。ぽつりぽつりと家が、田畑が、清流が・・・。
- ◎30分ぐらい歩いたかな、空はどんより曇っている。きつい登りのない山だけれど、それでもじんわり汗が出てくる。車を降りて着替えている時は、「ちょっと 寒いね」というぐらい、3枚の厚いシャツを着ている。
- ◎“かみなり杉”とわざわざ命名してある。山のでっかい樹に空洞部分がたくさん見られ、その中が炭化しているものもいくつか。雷にやられ燃え上がった跡である、よくまあ、山火事にならなかったものだ。「ここから北に少し行くと 巨木があるらしい」山田さんの情報で“京大演習林”の中に入った。「立ち入り禁止：京大」とうるさくおぬかしの陣地である。
- ◎佐々里峠734Mから小野村割岳931Mまでは、尾根道をちょっと登り、ちょっと下り、「ああ てっぺん」「次はあそこの 鞍部に下る」てな具合にだらだら上ったり下ったりの山である。巨木で有名なこの山、前回は雨に降られそそくさと退散したので、今日は、「巨木をじっくり見たい」と楽しんで歩いている。次から次に巨木が現れ、いささか食傷気味、なんて贅沢を言いながら、「小さくてもいい ケタイな形の奴を」と視線を右へ左へ。おそらく登山道以外の場所にも、巨木・奇木はいっぱいあるのだろうが、低い山とはいえ深い谷やら切り立った崖もあるので、注意をしなければ。
- ◎杉の巨木が多い、よくまあここまで育ったものだ。植林され手入れされている杉の木はすぐにでも材料として加工されるだろうけれど、ここのでかい奴は、まず切り出す手間が大変、切り出したところで、どこをどう使おうか工夫をしながら料理の手間も大変だ、と素人ながらにへたな心配をしている。
- ◎ネット情報：御所御料：みそまごりょう。かつてこのあたり一帯は、御所造営用材木の供給地で、伏状台杉と呼ばれるアシウスギの巨木が群生していた。御所はヒノキじゃなくスギなんだね？・・・。
- ◎巨木は下の方は四角い。でかいものだと、ワンボックスカーサイズの幹の上に二三本伸びているぐらいかな。
- ◎だらりだらり、上ったり下ったり、まったくした尾根道に、樹々の葉っぱが生えそろわないから、まわりがよく見える。上も下も見渡せる。「いいねえ」空を青くなりだした、昼に近づくとつれ暖かく、陽の光に樹々の枝も幹も若葉もキラキラ光る。熊が多い土地などでさかんに鈴を鳴らしている。朝方は鹿の声が聞こえていたが、今はゲラの機関銃音、「かっかっか」がよく聞こえる。ゲラ君、むち打ちに気をつけて。
- ◎12時ころにてっぺんにやってきた。てっぺんというけれど、尾根の続きの感じ、標識もなく三角点の石があるだけ。「さあ 弁当 ちょっと寒いね 風がない 下で 喰おう」暖かくなってきたとはいえ風は冷たい。今日は水をほとんど飲んでいない、めずらしいことだ。1Lの飲料水と1.5Lの水がザックに入っている。
- ◎弁当は朝が早いので昨夜作った。ご飯に野菜炒め、サンドイッチを二つ、パンを3個ほど入れてある。朝の行動中にサンドイッチを喰ったが、われながら旨い、中に挟んだ具の野菜にひと工夫。ひと工夫なんてえらそうだが、きざんだ野菜にドレッシングをかけただけ。今までは野菜にマヨネーズをかけただけ、汁気の多いドレッシングはサンドイッチをジューシーにする、これが旨いこれからはこれだね、がはは。
- ◎「岡村さん また 食べてる よく食べるね」これはいつも言われること、オレが少食になれば、山登りをやめる時かな、今は何を喰っても旨いね。
- ◎いくつかのでっかい樹の下の部分が空洞になっている。牛一頭が入るぐらいの洞もある、焦げているのもある、雷による火事だ、山火事にならずによかった。先ほども湯を沸かしたが、火事が心配なので余分な水をまわりに垂らした。関東でハイカーの不始末から何日間か燃え続け、たいへんな騒ぎを起こしていた。
- ◎高低差が少ない、しんどくないよ。これは違うね、普通にどんどん上って、帰りは普通に下るだけという山と比べて、疲労度は変わらない。先ほどから3回ほど道に迷った。「西に向かえばいいのだ」というけれど自然の地形は右に左に振れるふれる、なもんでそのままとことこ違う尾根を行き、「あれれ」というわけだ。
- ◎まもなくというあたりの斜面をトラバース、落ちたら一直線に谷底だ、霞んでいると平気だが見ると怖いね。

◎縄文はおもしろい、わくわくする。大島直行先生のおっしゃることもちょっと理解できるようになった。先生の叫び、「縄文人は 月と 蛇だ」この力説が、半分はわかるようになってきたが、まだまだたくさんの土器や土偶の写真を見て、「おもしろいねえ すごいねえ 感動するねえ」琴線が大揺れだけれど、「月 蛇 むむむ・・・」というところもおおいにある。「なにも そう 決めつけなくても・・・」とも思う。

◎ネットでは、縄文の扱いはどんなものかなと検索すると、これまた面白い話がちょこちょこ載っている。ちょっと休憩ということで、ネットのあれこれを抜き書きしてみます。

◎ネットで調べてびっくりである。縄文遺跡の多いこと・・・。たかだか、20か30ぐらいかと思っていたが・・・。北海道・東北地方には、びっくりするような遺跡の数がある。しかも丁寧に発掘してまとめられている。

◎15600年前に土器が生まれた。この時期はまだ氷河期だったそう。縄文時代の半ばころ温暖化現象があり100M以上の海面上昇があった。これを聞き、我が家の標高を調べてみると、“標高10M”となっている。1500年前の大阪平野はほとんどが海の底だったことを思えば、これはやばいね。現在叫ばれる温暖化現象の原因が温室効果ガス効果といわれているが、これだけではないのかもしれない。温室効果ガスとは、二酸化炭素・メタン・フロン・・・だそう。昨今の異常気象は、温室効果ガスが原因ではなく、地球の呼吸なのかもしれない。いずれにしても、異常気象はいやだね。

◎モースが大森貝塚で発見した土器を：Cord Marked Pottery:太いひも、細い縄。コードとは、「電気のコード」ぐらいの知識しかなかったが、植物で作った、「縄」だとは・・・。

◎縄文文化は日本列島全部にあった。九州に居た縄文人は 鬼界カルデラ噴火 7300年前で全滅した。鬼界カルデラ噴火の話は先年知ったが、日本で昨今起きる火山噴火の二桁も三桁も規模の大きな大爆裂らしい。今回のコロナウイルスの猛威は、2年目に入ったが、まだまだ進行中、世界的に先の読めない状態だ。カルデラ爆発が起きないとは言い切れない。恐竜が数時間で全滅した巨大隕石が地球に命中する確率もないわけではない。

◎貝塚というが、貝はカロリーが低い。木の実、獣の肉、魚などはカロリーが高い。何を食べていたかは、貝塚を調べる、骨の成分を調べる、そんなことである程度わかるらしいが、心配なのは、日々、満ち足りていたのかな。おそらくひもじい思いをしていたと思う、毎日まいにち、今のように、旨いものがあたらぬよね。

◎縄文人の住処、遺跡で再現された藁葺きやカヤ葺きじゃなく、土をかけて屋根に草が生えていた状態らしい。「穴倉暮らし」がぴったりの表現かな。薄暗いけど、暴風断熱には対処できる、火を焚けば湿気は飛び暖かい、夏は涼しい。「土蜘蛛」が穴倉に棲んで、「かえる」を食べていたという話だけれど、それはそれで快適だ。

◎酒：狩猟採集民は酒をもたないと言われてきましたが、どうも酒があったようだ。糖度の高い果汁は相性のいい酵母と出会えばアルコール発酵が進む。遺跡から酒の搾りかすのようなものが出てきている。飲んでたぞ。出土した大型の土器の内側にヤマブドウの皮や種が出てきた、酒である。酒器やらの土器も出ている。

◎漆の工芸品、これはなかなかいい色が出ているし、細工も上手くいっている。

◎ヒスイに開けた穴、びっくりするぐらいに上手く開けてある。時間がかかったらうな。

大島直行著〈月と蛇と縄文人〉

- ◎縄文と語源となった“縄”。縄文土器の模様制作に1万年以上も縄が使い続けられたのか。縄以外に、貝殻模様や、模様が無いものもあるが、縄文土器の“縄”の模様は、土器づくりの最初から地位は揺るぎません。
- ◎縄文は蛇を表す。脱皮や冬眠が、「豊穰と再生」とシンボルとされ男根になぞらえ、女性が身ごもるための水（精液）を月から運ぶと考えられた。
- ◎吉野裕子：民俗学：「神社のしめ縄が 蛇の交尾を 表している」蛇の脱皮や冬眠と言った生態、男性性器に似た形態に対して、「生命力の旺盛さ」をみてとり、先祖神にまで崇めていった。蛇に対する思いは、縄文人だけでなく、その後も日本文化の諸相の底を縫って流れ、現代におよんでいる。神社のしめ縄は蛇の交合の姿が象徴的に表されています。
- ◎なぜ土器が尖りになっていたのか。「尖底土器：反円錐形」と呼ばれる。この底が尖がった土器、「それは 土に刺せば 安定して便利」とっさにそう思ったが、この形式は日本全国に広がっていたらしい。
- ◎結論として、「縄」を「月」のシンボライズとして、「蛇」に見立てていた。と先生おっしゃるが、なかなか判然としない。縄文土器は鍋ではない。縄文の物造りが、「死と再生」という神話的世界観を背景に体系的に造られてきた。
- ◎土偶：現在発見されている土偶は18000点ほどです。徳島・島根・沖縄各県では出土していない。
- ◎土偶に関して、いろいろ説があったが、今は、男女の性は無く、「精霊」的な性格を持ち、地域時代を超え普遍的な価値をもつものと指摘されている。
- ◎大島先生は、「土偶のワキが甘い」という。何のことだといえ、腕が 胴体に ひつついていない」ほとんどすべての土偶が、ワキが見えるような状態だという。この理論は、「ほんまかいな」オレ思う。
- ◎ナウマン：世界の神話モチーフでは、ワキは新月と満月を、「闇と光」になぞらえている。ワキの下に線や円が描かれている。こういう特性は太平洋両側地域に分布する。縄文人は死をイメージする晦日月：新月・二日月、この三日間の闇の世界を光の当たらないワキになぞらえ、その恐ろしい闇を逃れるために腕を上げ光を求めたのであろう。
- ◎大島先生、虫歯の話。縄文人の虫歯率は北海道が2%、東北から四国までが15%。世界の狩猟採集民や農耕民と比較して縄文人は突出して高い。虫歯は細菌感染症、原因はでんぷん質の接種、穀類を多食する農耕民に虫歯が多い。でんぷん質を含んだ植物が虫歯の原因だそうです。
- ◎縄文人がヒスイ：翡翠に目を付けたのが7000年前。ヒスイは、白・灰・青・ピンク・黒様々な色があるが、縄文人は緑色のヒスイが好きでした。
- ◎大林太良：神話学者：緑とは木の若芽のことをいう。“みどり子”という言葉は若芽のような若い生命力。ヒスイの緑、若芽を連想する淡い緑、不老長寿の霊力を持ち、生命の力となる緑です。
- ◎ストーンサークルは178箇所見つかかり、秋田県74箇所、北海道29箇所、ほとんどが中部以北です。日本では環状列石と呼ばれる。墓という説、人の骨を入れた土器が出てきたところもある。祭祀場という説、いまだ説明されていない。その中からたくさんの遺物が出てくる。土器や石器の欠損品が多い、獣骨やクルミの殻など生活廃棄物が多い。能登健：命の終わった人の遺体、使用済み生活用具、食料の残滓、それらに感謝の念を込めて、神聖な列石の中に埋めたのでは・・・アイヌの伝統的な送り儀礼の場と同じ性格の場所なのだ。
- ◎各地で発掘される環状列石は、百年単位の時間をかけて造られたようです。整然とした円形ではなく、楕円形や方形、半円形や馬蹄形、集団の個性があるのでしょう。
- ◎大島先生は小林達雄の意見を載せている。小林達雄のランドスケープ論：冬至こそが世界の再生の起点ともなり、そうした信念、観念が冬至のまつりを世界各地に見る。縄文人は、二至二分を知った。決して太陽の動きを天文学的動機から追うのではなく、朝日夕日を観察することで、天気予報を知り、仕事の段取りを相談する。山並みのシルエットで、夏至の日の出日の入りの位置を知りえた。日曆の働きをしていた。